

女流作家は語る

円地文子 佐多稲子
平林たい子 網野菊

流作家は語る

田下文子 佐多稲子
平林たい子 網野菊

集英社

著 者

子文子
子林子
子菊子
子稲子

雄子
子道子
美子
子惠子
子桃子
雄子

女流作家は語る

一九七八年七月一〇日 第一版印刷
一九七八年七月二五日 第一版発行

定 価 七 八 〇 円

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二二〇―六三六
販売部 (〇三) 二二〇―六一七

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

女流作家は語る

目次

田地文子さんに聞く

——「伊勢物語」から「源氏物語」まで——

七

きき手

古山高麗雄

松本道子

「伊勢物語」の頃

「劇」作家から「小説」作家へ

プロレタリ

ア運動との関わり

戦争文学について

「不遇時代」脱出以後

嫌いな言葉と書き出し

「源氏物語」との接点

平林たい子さんに聞く

三

——小説だけを書こうとしたんじゃない——

きき手

瀬戸内晴美

河野多恵子

信州から東京へ——上京の理由

古典・外国文学・志賀直哉

男性について

プロレタリア文学がだめな理由

もう一つあり

得た人生

禽獣は裏切らない

「女流」の存在意義

林美美

子とのこと

ビクビクしては生きられない

網野菊さんに聞く

一〇三

——複雑な一族環境に生きて——

きき手 広津 桃子

少女時代を想う 志賀直哉先生と 赤坂・麴町界限 亡弟の

こと 月給十八円、部屋代三十五円 三月二十六日の記憶

父の想い出 よいものはよい

佐多稲子さんに聞く

一五三

——政治と文学の渦中の半世紀——

きき手 小田切秀雄

「驢馬」とのめぐりあい 「キャラメル工場から」の表現方法

作家と社会的生い立ち “私”が創る“私小説” これからやる

仕事？

あとがき

(円地文子)

二〇四

装丁 巖谷純介

女流作家は語る

円地文子さんに聞く

——「伊勢物語」から「源氏物語」まで——

きき手 古山高麗雄

松本道子

「伊勢物語」の頃

古山 僕から口火を切ります。時間的なことはいろいろ前後するかもしれませんが、昨日、円地さんにお目にかかった当時のことを、年譜などを引っ張り出して、ちょっと思い出してみたんですが、気がついたことは、円地さんは二十歳ぐらいのときから文壇に出られていて、もうすでに流行作家になっていたというような、そんなイメージがなんとなく頭にあったんですが、実際には、二十歳のときにお書きになったのは、戯曲で、まず登場されて、それから、三十代のころはもっぱら奥さんをやっていたらっしゃいまして（笑）、お子さんもお出来になって、四十近くになってから小説のほうをお書きになっているんですね。私がお目にかかったのは昭和二十七年だったと思いますが、そのころ、私は河出書房の「文芸」という雑誌の編集者をやっておりました、そのときにお伺いしたのがはじめてだと思うんです。そのころの、お目にかかった印象では、私は不遇作家をお訪ねしたつもりはなくて、たいへん才能のある作家のところに、ごく自然な気持でお邪魔したというようなつもりでいたんですが、全集の解説やなんか読みますと、不遇時代というようなことが書かれておりますね。



円地 文子

私は編集者としては、当時は不遇でございまして、非常にだめな編集者だというんで、ほかの人に比べて、月給なんかもちょっと上がり方が、率が悪くて、自分だけ不遇だと思つてたんですけれども、あの当時先生は不遇だったんでございましょうかね（笑）。

円地 おっしゃるとおり、不遇だと思つていました。それで古山さんも不遇でいらしたようでした。少なくとも、あの河出の「文芸」によく原稿を持ち込みまして、古山さんが「これはなかなかいいから」なんて言つて載せようとしてくだすつても、なかなか載らなくて、そのたびにブツブツ愚痴をこぼして、あなたも愚痴をおこぼしになりましたから、あまり才能を認められて、豊かな氣持でいた作家ではなかったことは確かだったんじゃないでしょうか（笑）。

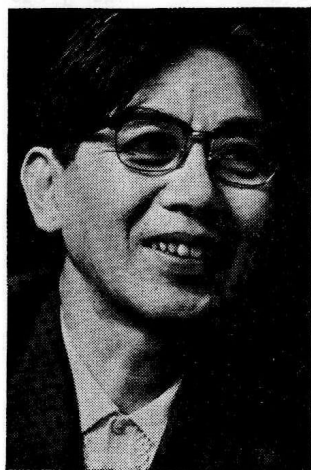
古山 いや、僕は非常に愚痴っぽい男でございますから、愚痴をこぼしたと思ひますけれども、あの当時の僕は駆け出しの編集者として、円地さん、大谷藤子さんに、実は……、

円地 大谷さんは書いていましたね、あの時分。

古山 ええ。そして、お二人の作品をぜひ「文芸」に載せようと思ひまして、そしてただきに伺って、いまよりもっと、いまだって大したことありませんが、小説の読み方なんかも非常に浅かったんですが、たいへん感激いたしましたして、載せようとしたんですが、当時、「文芸」の編集部は三人しかおりませんで、名前を出しますと、巖谷大四さんが編集長で、山川さんという女性の方と私と、三人の編集部で、だいたいにおいて非常に民主的に、多数決で作品を採用させていただいていました。ところが、たいいてい私は二対一で負けまして、でも、結局掲載させていただきましたけれども、今月と想っていたのが翌月に延びたというような記憶があります。それが「伊勢物語」だったと思います。後に題をお変えになりましたですね。

円地 はい。あのときはなにか古典の特集じゃありませんでしたかしら。「歌のふるさと」という題で、それで「伊勢物語」という副題だったんじゃないかと思ひます。

古山 そうですね。あまり古いことなので、ちょっと記憶が曖昧になっていますが、あれからその翌年、あの作品が「文芸」に載った



古山 高麗雄

のが二十七年で、二十九年に女流文学者賞をおとりになった。私は二十八年に「文芸」をやめまして、それから、同じ河出書房でしたけれども、別のセクションへ移りまして、それで、いわゆる編集者としては先生のところへお伺いしなくなるわけです。遊びには行ったような気も、一方ではしていますけれども。

そして、二十九年に賞をおとりになって、そのころから、それまでも中間雑誌にはずいぶんお書きになっていらっしやいましたですね。

円地 中間雑誌はあの時分そんなにありませんでした。「小説新潮」です。ちょうど私が二十六年ぐらいから「小説新潮」に書くようになりまして、それからあとは、その「文芸」にたまにポツンと書かせていただくぐらいで、中央公論に「ひもじい月日」を書くまでは、「小説新潮」ばかりでした。

古山 「別冊文芸春秋」なんかにはお書きになりませんでしたか。

円地 いえ、そういうご注文は全然なかった。

古山 ありませんでしたか（笑）。

円地 そうです。「小説新潮」がときどき頼んでくれるので、それで「女坂」なんかもポツポツと……。それもとても気兼ねをしまして、向こうからあれという注文ではなかったものですから、年に一回か二回ぐらい書きましたんで、別に長くかかったと言いましても

ね、あれ八年かかっているなんて偉そうに、いま言うんですけれども、ほんとにそういう意味ではなかったんで、編集のほうから、あの作品を連作で続けてくれと言われたわけではないんです。ですから、なんか短篇を頼まれるのの間に、やっぱり短篇として気兼ねをしながら書いていたんで、自然長くなったというのが、実際のところでございますね。

古山 女流文学者賞をおとりになったのは、中央公論の「ひもじい月日」ですね。

円地 はい。あれも半分持ち込みのような原稿なんです。その頃は、笹原金次郎さんが中央公論の編集部いられた頃で、笹原さんに、あの作品の素材のようなことをお話ししたら、書いてごらんないなんて言われてましてね、それで書いて持っていくって、そして載せてくれたのが、あの「ひもじい月日」。やっと通ったというような感じでしたね。

ですから、ほんとに頼まれて書いたのは、そのあとの「妖」がはじめてだったと……。

古山 そのところからたいへん引っ張りだこになりまして……。

円地 いえ、それほどじゃないです（笑）。そんなに、引っ張りだこになったほどじゃあ



松本道子

りませんけれど、あちこちから書けと言ってくださるようになったのは、ちょうどその時分から。「群像」なんかでもときどきお頼まれました。

松本 そうですね。三十年ごろから文芸雑誌の仕事が多くなられたと思うんですね。いま古山さんが、不遇作家とか不遇時代というふうにおっしゃいまして、そういう時代があるわけなんですけれども、私がお目にかかった最初も、たぶんその不遇時代だったはずなんです……。

円地 はい。軽井沢でお会いしたんじゃない？ あれは室生（犀星。明治三二・八・一）昭和三七・三・二六）先生のところかしら。

松本 はい。室生先生から、「円地文子さんを『群像』にどうでしょうかね」というようなことをよくお伺いしていたわけなんです。

「小説新潮」とか、そういう雑誌にお書きになったとき、わざわざ雑誌を手許に持ってこれ、目次をひらいておっしゃったこともございました。その頃のお作品の中には、後に「女坂」になったようなすぐれたものもあったわけですけど、何かまだ直接のご縁がなかったんです。そういうところにちょうど軽井沢で、室生先生がお引き合わせくださったようなことでお目にかかったんですけど、それが不遇作家とおっしゃったようなイメージでは全然ないわけです。